

## 學界の動き

### 國際經濟學會

秋爽の一九五一年十一月十一・十二・十三の三日にわたり風光絶佳の神戸大學において國際經濟學會第四回研究報告會が催された。全國から集つた會員約六十名、活潑な報告と討論をもつことができ多大の收穫をおさめた。

第一日十一月十一日 神戸大學にて

貿易乘數理論の一考察

J・S・ミルの國際均衡論

國際價值論の基本的問題點

イギリスとアメリカ

ソ連邦經濟における蓄積

谷口氏の待望久しき報告は三つの重要な論點を含んでいた。

第一に投資を基點とする所得(或は需要)乘數と供給乘數とは表裏の關係にあるという乘數論の一般的定式化、第二に輸出―輸入は投資―貯蓄と同じように取扱われているが、輸出は投資増をもたらす限りにおいて所得を創出するのだから、投資だけを中心にするべきであること、第三に輸出需要乘數、輸出供給乘數、輸入需要乘數、輸入供給乘數の四つを考え、その比較検討

神戸商大 各口重吉氏

一橋大 小島清氏

立教大 山本二三丸氏

大阪市大 吉田義三氏

一橋大 野々村一雄氏

### 學界の動き

によつて貿易による所得増減即ち貿易利益を判定すべきである。非常に興味ある問題提起なのであるが、第一點については需要乘數と供給乘數が表裏で同一なものではなく、その間に乖離が生じ、物價水準變動(ケインズの $e$ 、 $e'$ の問題)等の現象の生ずることを見逃してはならぬこと、第二點については例えば滞貨輸出が報告者並に都留教授の如く果して所得創出効果をもちえないであろうかということ、第三點については輸出供給乘數とか輸入需要乘數という新概念の意味、内容、これらの諸點について疑問が提出され討論が行われた。小島の報告は、従来ミル説は交易條件變動による需要の價格效果的變動のみが國際均衡化要因である(古典的トランスファー論)と解されていたのに對し、生産轉換を基とする輸入需要の所得效果的變動或は金移動に伴う貨幣所得水準變動のもたらす所得效果的輸入需要變動という機構がむしろミルの本旨であることを指摘した。これに對しては、北川、藤井兩教授から所得効果という概念の曖昧性並に所得効果によつても交易條件は變るから、依然價格效果説といひ得ないかとの質問があつたが報告者は見解を變えなかつた。山本氏の報告は本學會創設以來の名和、赤松兩教授の論争についての新たな再批判なのであるが、マルクス價值法則についてのマルクス學者間における解釋の對立をさらけ出したのみで國際價值論等にまではなお距離があるように思われた。吉田氏の報告はイギリスの戦後經濟特に再軍備下のドル不足問題、その對米抗争を衝きイギリスによる第三勢力の結成

一橋論叢 第二十七卷 第二號

を主張するのであるが、いささか論證不充分的の觀があつた。野  
野村氏はソ連邦において取引税を通じていかに資本蓄積が計畫  
され配分されているかを理論的に分析されたが、同氏の報告は  
本大會においても期待にそむかぬスマートなものであつた。

第二日十一月十二日 神戸大學にて

共通論題「日本貿易のあり方」

日本の對東南アジア貿易

不足食糧の輸入か生産か

インフレ問題と信用政策の在り方

一九五〇年度における

東南アジアの貿易概況

日本貿易と資本蓄積

日本貿易のあり方

共通論題についての合同討論會

第三日十一月十三日 神戸貿易會館にて

社會主義諸國間の貿易問題

香港貿易の性格

貿易業者との懇談會(午後一時—五時)

この兩日を通じて日本貿易の諸問題が、業者との懇談をも加  
えて、殆んどあらゆる角度から分析され検討された。中共貿易  
の可能性並に重要性如何、特殊地位をもつ香港貿易の過去と將  
來、ポンド残高累積の問題、これらが日本貿易の外部情況の問  
題であり、他方、國內經濟開發か貿易振興中心か、貿易業と生

神戸大 川田富久雄氏

農業總研 東井金平氏

東 銀 安東盛人氏

安 本 原 覺 天氏

名 大 北川一雄氏

京 大 大松井清氏

一橋大 赤松 要氏

司會神戸大 宮田喜代藏氏

農業總研 丸毛 忍氏

神戸大 柴田銀次郎氏

産の組織、インフレーション等の國內的問題がある。それぞ  
の立場から分析が加えられたわけであるが、合同討論會にみ  
られたように、(1)中共貿易、東西歐貿易また社會主義諸國間貿易  
等要するに異なる體制の間の貿易に關する原理の究明が今後の重  
要課題であることが指摘されたのは重要な前進である。(2)國內  
開發か貿易振興かについては、ハロッドの成長率分析を戰後日  
本經濟に適用された北川氏の報告が最も注目されたのである  
が、最近における輸出成長率の方が國民所得成長率より大で出  
超へ向う傾向にあることは、本來外資導入—入超によつて國內  
發展を優先すべき日本經濟にとつてむしろ警戒すべきであると  
指摘された。しかしここには日本貿易規模が過小であるのを擴  
大すべき *take-over change* 過程にある現情を、直ちに成長  
率分析にあてはめた誤謬が伏在するのではないかという點に論  
議の沸騰を見た。

とまれ、理論と實際の兩面にわたつて衆知をあつめ討究しえ  
たことは本學會並に日本貿易にとつて喜ばしいことであつた。  
(小島清)

執筆者紹介

- 赤松 要……………一橋大學教授
- 板垣 與……………一橋大學教授
- 木村 元……………一橋大學教授
- 吉野 昌甫……………一橋大學特別研究生